

# 独尊的な、あまりに独尊的な

Written by Shintaku Tomoni

## 第5回「日本のアトリテラシー」

最近、同年代のアートコレクターさんと呑む機会があった。神田にある、現存する最古の居酒屋だという「みますや」にて。

そこで、「仮に、自宅にリヒターのオリジナルが飾ってあるって言ったとしても、まず理解されませんからねえ。だったら、誰でもわかるゴッホとか印象派でも買おうかということになってしまう」というようなことを話した。

まあ、そんなこと当たり前だといえばそれまでだが、これは現代日本のアートシーンにおける暗部であり、真実だと思う。ちなみにゲルハルト・リヒター（1932-）はドイツの画家で、2012年にサザビーズにおけるオークションにおいて、生存する画家の作品としては史上最高額の約26億9千万円で落札された巨匠中の巨匠である。

が、しかし、そんな奴のことは、ふつうの日本人は誰も知らない。ほくみたく美術をかじっている人ならば、「リヒターすげえ！」というのは、「野々村議員とんでもねえ！（珍しく時事ネタを使ってみました）」というくらい当然すぎることなのだが、しかし、アート界は小さな小さな村社会であるので、アート界の常識は世間の非常識と言っても過言ではない。

それはともかく、日本のアートを盛り立てるには、ごく普通の日本人のアトリテラシーの底上げが必須だと思うのだ。アートを買う上客は、なんといっても富裕層である。つまり金持ちは、自己顕示欲が強い。なんて、皆が皆そういうわけではなからうが、それでも、自分の地位・財力をなんらかの形で示したいというのは、ごく自然な気持ちだろう。

家なら白金が田園調布あたりに一軒家がタワーマンション、車ならジャガーかベンツかなんかってことになる。そしてダメ押しの財力の誇示でアートをかうのである。しかし何をかうか？自分が金持ちだとしたら、どうだろう。アートに別段の興味があるわけでもない。正直、“すごい”アートならなんでもいい（何がすごいのかよくわからんが、とにかくはすごいやつ）。そう、何をかうにしろ、人さまがすごいと思ってくれる、そう思われるものが欲しいと思うのではないだろうか。

そこで現代アートのハードルは高い。だって、誰も知らない。褒めてくれない。家に招いて、これはリュック・タイマンスの新作でね、エッヘン、なんてやっても誰も理解してくれない。反応もいまいちである。なんだかよくわかんないけど高いんだろうなという感じでボカンとしていやがる。これじゃあ、おれはいったいなんのために金持ちになったんだという感じである。

だけど、これはルノアールの初期の作品でね、なんて言おうものなら、「ええッ！すごい！印象派の巨匠です！こんなところで見られるなんて感激です！アハッ！ウフッ！エヘッ！」ということになる。なるって言ったらなる。

こう考えると、金持ちの選択は後者以外にはあり得ないのではないだろうか。

だから、庶民のアトリテラシーの向上こそが、日本のアート界の隆盛の鍵を握っているのである。おい、愚民ども。印象派にばかりアホ面下げて列を成してるんじゃない。ちゃんとアンドレアス・グルスキーや、フランシス・ベーコンにも異常な行列を作ってキャッキャしなさい。

とりあえず、英語を学ぶ前にまずアートを勉強しなさい。アートについての造詣が、世界では礼儀作法のごとく評価されるのである。これは本当の話。そこのあんた、いくら金持っても、海外ではバカで無知な人と思われますよ。

今日は終始えらそうな話をしたが、事実わたしはえらいのだから仕方がない。よくよく敬うように。ではまた。